

エックハルト『ヨハネ福音書註解』における「存在」

中山みどり

1 問題の所在

エックハルトは『ヨハネ福音書註解』執筆の意図に関して、「キリストの神性と三位一体の奥義」を記す『ヨハネ福音書』の言葉全体を「哲学者たちの自然的論証」によって解釈することだと述べる¹⁾。そうした彼の意向を反映して、神学と哲学にまたがり両者を統合する概念である「存在」(esse)は、『ヨハネ福音書註解』において最も重要な概念の一つであり、また「神は存在そのものである」という命題を基軸として展開される存在に関するコンテクストは、多岐に渡り複雑に錯綜している。たとえば、エックハルトは神の三位一体のペルソナの流出・発出との関係から存在を捉えるだけではなく、被造物の創造における存在に関して、また神への還帰を目指し被造物が存在を渴望するあり方、更には被造物の中でも特に人間における存在と知性認識との関連性などについて述べている。

本稿ではそのうち、神から被造物に存在が賦与される創造と、あらゆる被造物が存在を欲するという存在への渴望の連関をエックハルトがどのように捉えているのかについて考察する。特に、人間存在において神への還帰と表裏一体の関係にある存在への渴望が問題となるとき、存在論が神認識論と構造的にいかに関結しているのかに焦点を当てる。その際、『ヨハネ福音書註解』の特徴の一つとして、『ヨハネ福音書』冒頭の「初めに言葉があった」(In principio erat verbum)というアウトリタスをめぐる解釈が内容的に重要であり、量的にも全体の約九分の一を占めており、言葉・ロゴスの理解が存在論に密接に関わっていることが予想される点に留意しつつ、考察を進めたい。

2 三位一体のペルソナとの関係における存在

第一に、神の三位一体のペルソナとの関係における存在、即ち万物の創造以前の次元における存在に関しては、存在、一、真、善の超範疇概念が導入されて考察されている。存在、一、真、善の四概念は、本来的に神に属する概念であり²⁾、これらは同一のもので、その基体に関しては実在的に置換可能なものであるが、それに固有の意味内容ないしは各々の固有性によって区別されるといわれる³⁾。

そして、一、真、善は各々父、子、聖霊の三つのペルソナに帰される。一は最も直接的に存在に関わり、無限定の存在を最初に最小限度に規定するのであり、一そのものにはその意味内容と固有性からして、最初に産出するものであることとすべての神性と被造物の父であることが帰属するとされる⁴⁾。即ち、一はすべての流出の第一の始原としてそれ以上遡及し得ない「始原のない始原」(principium sine principio)と呼ばれ、「生まれず生む」父のペルソナにあたるのである⁵⁾。換言すれば、一は始原として働き存在を与えるが、その意味は一と同一である自己自身を生み出すことである。存在の完全性を示す一は、類似性などの他性と無関係であるからである⁶⁾。従って、真は一と同一の実体として一のみから産み出される⁷⁾。その固有性から、真はものと知性とのある種の一致であり、認識されたものと認識するもの間に生まれた子孫であるという。それゆえ、ロゴス・理念・言葉である「生まれず生まれる」子のペルソナに真は帰されるのである⁸⁾。善は一と真が一なるものである限りにおいて、一と真から発出する両者の結合としての愛を意味し、聖霊に帰される⁹⁾。このように一、真、善に各々父、子、聖霊のペルソナが対応するのに対して、存在はいかなる位置を占めるのだろうか。

存在は神の本性であり、神は存在そのものである¹⁰⁾。また、存在は第一の現実態であって、完全性及び完全なるものに関わり、光に譬えられる¹¹⁾。従って、三つのペルソナは存在を神の本性として共有するのであるが、エックハルトにおいてはペルソナによる本性の共有よりも、存在が生む、生まれるという産出 (productio) と無関係であることが強調されている。即ち、エックハルトは、存在は「他のものとは関係しないものであり、無限定なものであるので、その意味内容からすればいかなる産出の始原でもない。つまり、無差別的なもの、無限定なものからは何ものも発出しない」¹²⁾、さらに「神は存在と本質の観点の下では、いわば眠っているもの (dormiens) であ

り、隠されているもの (latens) であり、それ自身においては隠されているのであり、(……) 生むものでもなければ、生まれるものでもない」と述べるのである¹³⁾。存在は、他のいかなるものにも依拠せず、差別化・区別化し得ないという性質をもつ。だが、出生 (generatio)・発出 (processio)・流出 (emanatio) という広義の一切の産出関係は、神が神自身を限定することによってはじめて可能になるので、存在自体はいかなる産出の始原ともなり得ず、産出関係を超越するのである。他方、「存在は内奥 (intus) と本質に関わる」とされ、内奥性という神の性質が存在の固有性と考えられている¹⁴⁾。神の存在こそが最も内奥に存在するとは、被造物にとってそうであることを意味するだけでなく、一義的には「隠されている」神自身にとって創造に先行する神内の次元で、存在が最内奥のものであることを意味するのである。

ところで、一切の産出と無縁であるにもかかわらずその同じ存在そのものについて、「本質そのものないし存在は、一なるものと父性の意味内容ないし固有性の下においては、被造的なものであれ、非被造的なものであれ、すべての存在者のうちへと発芽しつつ、呼吸しつつ、創造しつつ、溢れ出ている」という¹⁵⁾。つまり、すべてのものに存在が賦与されること、即ち一切が存在者たらしめられるということは、始原である父の一性においてなされるのである。父が「生む」ことによって、非被造的な各々のベルソナにおいて、存在が充溢し、一性、真性、善性という存在の完全性が獲得される。また、エックハルトによれば、新約聖書を旧約聖書から区別するのは、子のベルソナの流出が明示されている点なのであるが¹⁶⁾、父の一性によって限定された存在が、父から子へと自己同一のものとして渡されることが、子のベルソナの流出であるといえよう。神の本性である存在は、神が三位一体のベルソナとして自己を展開する基盤であるが、展開そのものはあくまでも一なる父に依拠しているのである。産出の始原である父なしに、存在が与えられることはない。この点をエックハルトは、特に神内における産出関係の有無に基づいて、存在を他の一、真、善の三概念と明確に区別することによって示しているのである。

3 創造における存在

第二に、神と知的実体である天使・人間・自然の全被造物を対比的に捉える場合のうち、創造における存在について考察する。被造物はそれ自体としては無ないし非存在であり、第一原因である神の内、神のみから存在を受け取るとされる¹⁷⁾。詳述す

れば、エックハルトは原因と結果の関係において捉えられる存在を「これこれしかじかの存在」(esse hoc vel hoc)と「絶対的で端的な意味での存在」(esse absolute et simpliciter)の二つに分けている¹⁸⁾。結果においてこれこれしかじかの存在として把握される際の個別の事物は、実体的形相因などの特殊原因をこれこれしかじかの存在者として持つ。しかし、これは二次的原因に過ぎない。それに対して、すべての結果である全被造物を生じさせる第一原因は神であり、神のみから端的かつ絶対的な存在、存在そのものが賦与されるのである。

そして、すべての存在者および存在性の第一の範型的原因としての神内には、父と子と聖霊が存在するとされ、神内でのペルソナの流出が被造物の創造の範型になっているのである¹⁹⁾。では、創造の範型としての父と子はどのような関係にあるのだろうか。

父が子を生むこと、子の出生とは、父である始原からの言葉・ロゴス・理念・知性の発出として理解されている²⁰⁾。エックハルトによれば、言葉とは本来的に言葉を生み出すものを告げ知らせ明らかにする働きをなすのであって、子である言葉は父を証す²¹⁾。父に一性が帰属するように、子には同等性が帰属し、父と子は同名同義的に同等の関係にあるという²²⁾。

それに対して、被造物は子の固有性である同等性を媒介として、一性からの降下という形で創造される。というのも、被造物は神とは無限に隔った存在者であるので、神に対して不等性を有するが、不等性は同等性を媒介とすることなしに、一性から降下することも発出することもあり得ないからである²³⁾。そして、被造物は類比的な仕方での神の存在性、一性、真性、善性を得るのである²⁴⁾。特に重要なのは、存在性が神自身にとってだけではなく、全ての被造物にとっても始原である一性の固有性の下において、あらゆる被造物に受容される点である。エックハルトは神の存在が父の一性ととも万物に浸透することを、世界(universum)という名称が一なるものに向いたもの(uni-versum)に由来することに関連づけて説いている²⁵⁾。また、神の真性は一性から直接に降下し、天使と人間の靈魂という認識的存在者を産み出し、善性は真性を媒介として一性から直接に降下し、人間の靈魂以外の身体やすべての自然という実在的存在者を産み出すという²⁶⁾。以上のように、被造物を存在たらしめる創造は父の一性が始原となり、子の媒介によって成立するのである。

4 存在への渴望

ところで、エックハルトは226節で旧約『伝道の書』(1.7)「そこから諸々の流れが出てくるその場所へと、それらの流れは還帰する」を引用しつつ、「神はすべての被造物を創造することによって、まさに神が創造するということによって、すべての被造物がその全存在の第一原因としての神に従い、秩序づけられ、向きを変え、還帰することを、すべての被造物に語りかけ、課し、世話をし、指示する」と述べる²⁷⁾。エックハルトによれば、既に神の創造において創造されたすべてのものの還帰まで射程に置かれているのである。そして、被造物が神への還帰を果たそうとすると、神の本性である存在への渴望が被造物において引き起こされる²⁸⁾。つまり、神への還帰は存在への渴望と表裏一体の関係にあるといえる。それでは、創造における神から被造物への存在の賦与と、被造物が持つ存在への渴望に関して、どのように整合的に理解できるだろうか。

第一に、被造的存在が宿す不安定性から考えてみる。知的実体以外の一切の被造的存在者を形相と質料の観点からみると、被造物が存在を持つのは、形相において、かつ形相のみを通してであり、「いかなる複合体ないし質料も、形相が与えるところの、ないし形相そのものであるところの、従って形相の結果生じるものであるところの存在がなければ、存在を持たない」とされ、存在は形相に結果するものと捉えられている²⁹⁾。その一方で、悪が質料から生じ、質料はほとんど無に等しく、または可能態ないし可能的にあることを意味するという理由から「すべての形相と本性とは、質料から逃走しいわば質料を忌避している」とあるように、形相と質料は存在を挟んで対立的に理解されている³⁰⁾。形相は存在の完全性に被造物を近づけるが、質料は存在の欠如、即ち無へと被造物を引きつける働きをなすからである。従って、被造物は創造によって存在を受け取ってはいてもそれによって安定するのではなく、存在と無の間に生じる緊張状態に置かれ、存在を渴望するといえよう³¹⁾。エックハルトはこうした不安定性のゆえに強まる存在への渴望を、「存在は、存在の外にあっては、すべてのものが不穩であるものであり、存在をすべてのものが求め、存在しないものすらが存在するようになるために求めるものである」と表現している³²⁾。

第二の理由として、被造物に対して存在が目的因として働く点が挙げられる。神は一切の存在者に対して、作用因、形相因、目的因として関わるが、この三つの原因の

中で目的因が第一の原因とされる³³⁾。エックハルトは『ヨハネ福音書』冒頭の「初めに言葉があった」に対応させて、「内に (in)」が目的因で、「初め・始原 (principium)」が作用因、「言葉 (verbum)」が形相因にあたる³⁴⁾。その際、言葉である子が、始原である父「から」とされずに、父の「内に」存在しているといわれているのは、「内に」という語が目的因の本性を示しているからだという独特の解釈をしている³⁵⁾。その意味するところは、既に見たように存在は最内奥のものであるので、存在が目的因であるということであろう。即ち、存在は被造物を神へと志向させる目的因として働くのであり、神を始原の観点からみると神は作用因であるが、目的因としての神は存在なのである。

ところで、神においては始原と終局および目的は一致する³⁶⁾。従って、神は被造物を神へ還帰させることを究極の目的として、創造において存在を被造物に与えたのである。存在を賦与された被造物の側からすると、まさに存在が与えられることによって被造物は存在へと呼び出され、存在を渴望し、存在そのものである神を志向するのだといえよう。

5 人間にとっての存在

それでは、被造物の中でも特に人間においては、どのようにして人間から神へ向かう還帰運動は成就し、存在への渴望は満たされるのだろうか。エックハルトは、人間が自己の存在の究極の源泉である神に向かって還帰することをいかに強く欲しているかについて、「人間は、神の全体的実体の似像に向けて造られているのであり、また一なる全的なものに基づいて存在のうちへと産み出されているのであり、神に似たものに帰ることが人間を満足させるのではなく、人間は人間がそこから出てきた一へと帰るのであり、このことのみが人間を満足させる」と述べている³⁷⁾。人間存在にとって還帰への衝動は、神に似たものに帰ることによっては満たされることがない。それが満たされるのは、本来そこに人間存在が由来する「始原のない始原」と呼称される一に帰ることによってのみである。一は、神と被造物の間の類比的関係性を超出しており、人間のみが一への還帰を希求するところに、人間存在の特殊性が示されている。

では、人間存在を他の被造的な存在から区別し、人間を人間たらしめているものとは何であろうか。ここで、今一度人間の創造に立ち返ってみる。人間は、靈魂の内なる思惟的存在者、即ち知性と、靈魂の外なる実在的存在者、即ち身体に分割される。前

者はロゴスである真性に基づいて創造され、後者は真性を媒介として一性から直接に降下した善性に基づき、前者の下位にあるものないしはその後なるものとして創造された。というのも、善の理念そのものが真の内にあることによって、非認知的存在者である身体は、認知的存在者である知性の内にその原因を有するからである³⁸⁾。このように、身体は知性よりも下に価値づけられ、人間を人間たらしめているものは知性 (intellectus) だと考えられている。知性には言葉が理念的なものとして深く関与しているが、それによって、人間は事物をその始原において認識することができるのである³⁹⁾。それだけではなく、更に重要な点は、「知性の対象は、本来的には (proprie) 端的な意味における、かつ絶対的な意味における露な存在者 (ens nudum simpliciter et absolute) であり、それはただ単に善のみならず、真と一よりも先なるもの、より単一なるもの、かつより卓越したものである。(……) それゆえに明らかなのは、神の露な実体、我々の至福、即ち神であるところの存在の充溢は、知性によって存立し、見出され、受け取られ、到達され、汲み取られる」とあるように⁴⁰⁾、本来的かつ第一義的には知性の対象が、端的で絶対的な意味における露な存在者とされている点である。先に、人間は一への還帰によってのみ満足できると述べられていたが、露な存在者とは、すべての産出の始原である一よりもさらに先立ち、単一の存在そのものといえよう。つまり、人間の神への還帰は、人間を人間たらしめる知性による露な存在そのものの認識によって成就するのである。

他方、エックハルトは、知性と存在の関係について、知性認識は存在であるが、知性認識する前は存在ではなく、無であると述べている⁴¹⁾。即ち、知性が知性認識する以前、可能態として存在を持つことはあり得ず、知性認識してはじめて知性は存在を得る。認識することがなければ知性ではなく、知性における認識の重要性が強調されている⁴²⁾。それならば、一体どこから知性認識はその存在を得るのかというと、知性認識の対象から受け取るという⁴³⁾。従って、一般的な事物の知性認識においては、個別の認識対象から「これこれしかじかの存在」を受け取るのだが、それとは次元を異にする「絶対的で端的な意味での存在」が賦与される知性認識があり、エックハルトが両認識を区別しつつ、どちらの場合も知性認識の存在性の獲得は、全面的に認識の対象に依拠すると考えているのは明らかである⁴⁴⁾。そして、後者の知性認識こそが、存在そのものである神を認識対象とする神認識なのである。人間に存在を与え人間の生の目的である神を認識することが真の神認識であり⁴⁵⁾、神認識によって、神は知性

認識にとってそれ自身の基体よりも何よりも最も内奥のものとなるのである⁴⁶⁾。

また、こうした存在と知性の不即不離の関係は、人間存在に先立ち、子のペルソナに由来する。『ヨハネ福音書』(1,18)の「父の胸におられる独り子が神について語った」の解釈として、エックハルトは子において「存在とは知ることと語ることである」とする⁴⁷⁾。即ち、子において存在と認識は同一のこととされ、ロゴスは存在を自己同一的に証明するのである⁴⁸⁾。

それでは、人間の知性は具体的にはどのような場合に神を認識する可能性を持つのだろうか。人間はいつでも神を知性認識できる状態にあるのだろうか。そうではないことに容易に気づくだろう。なぜなら、人間は一方では存在を渴望し神に従おうとしながら、他方では神を思い浮かべることもなく、いかにして名誉、富、享樂を得るかに関心を持つような、存在から無へ落ち込んでいく可能性を抱いた不安定な存在だからである⁴⁹⁾。さらに、もし人間が神以外のものを神として認識するならば、人間は神と誤認した当のものから存在を受取り、その結果、神の子ではなくなるであろうともいわれている⁵⁰⁾。つまり、エックハルトによれば、知性のうちに神以外の何らかの存在がある限りは、神から存在そのものを与えられること、即ち神を認識することは不可能なのである。神以外の何らかの存在がある状態とは、知性がこれこれしかじかの個別の被造的存在に囚われている事態を示す。この時、人間にとっての存在とは、本来は「存在を与える始原としての神にとっての存在」⁵¹⁾に等しいものであることが忘却されている。人間は、存在そのものを受容する姿勢になく、被造的存在がそれ自体虚無であることに気づかず、それらがあたかも人間のために存在しているかのように思いなしている。だから、エックハルトは神に従い神を認識するために、一切の被造性の放棄を主張するのである。「知性はすべてのものを知性認識するためには、(……)知性が知性認識する諸々のうちのいかなるものでもない。それゆえに、すべてのものがその内に存在する神に従おうとする者は、一切のものを放棄しなければならない (debet relinquere omnia)」と⁵²⁾。

つまり、知性がいかなる認識対象からも存在を受け取らず「裸の板」⁵³⁾として空になり、ただ露な存在そのものに向かって開かれたその時にはじめて神認識が可能となるのである。エックハルトは一切の被造性の放棄を、知性が神のみから存在を受け取るために、認識対象である神に対して受動性に徹することとして理解している⁵⁴⁾。徹底的に受動的になった知性とは、知性が個別的存在者によって混濁された状態から脱

すること、換言すれば一切の被造的存在から離脱した知性を意味するのである。

6 結 論

以上のようにエックハルトは、人間を初めとする一切の被造物の存在への渴望を強調し、その原因を存在が目的因であることに求めている。被造物は自ら存在しているのではなく、創造において神から存在を与えられることで存在たらしめられるのだが、まさにそれゆえに存在を渴望するのである。そして、人間における存在への渴望を知性認識による神認識として捉えることが可能となるのは、知性認識における存在の賦与は認識の対象からもたらされるからである。ゆえに、一切の被造性を放棄し被造的存在から離脱し、認識対象として神のみを受容することによってはじめて、知性認識は神から存在を賦与される。そのためには、人間はまず「謙遜」(humilitas) でなければならないとエックハルトは考えている⁵⁵⁾。謙遜に基づく被造性からの離脱こそは、神にのみ完全に従属し人間が存在し生きる目的である神を認識する道を開くからである。このように、人間の知性認識の受動性を核とする存在論から神認識論への展開は、創造とともに神への還帰の構造においても、子のペルソナが重要な役割を担っていることによる。エックハルトにおいては、子の認識と存在は自己同一のものであるために、子の固有性である真性に基づいて創造された人間の知性は神認識の可能性をもつ。だが、可能性の実現には知性の被造性からの離脱が不可欠であって、エックハルトは離脱を通じた神認識を、子の自己無化と受肉に俟う行為として理解している。つまり、露な存在そのものを求めて止まないダイナミックな存在論は、ロゴス理解との深い関わりにおいて成立しているのであり、その点が『ヨハネ福音書註解』における存在論の著しい特色をなしているといえるだろう。この同註解書における存在論を、他のラテン語著作における存在論・ロゴス論と突き合わせ整合的総合的に解釈することを、今後の課題としたい。

注

エックハルトの著作からの引用は以下のテキストによる。

Meister Eckhart, *Die lateinischen Werke* Stuttgart 1936ff., hg. und übersetzt von Karl Christ und Joseph Koch, Bd. III: *Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*. また、中山善樹訳『キリスト教神秘主義著作集7 エックハルトII』教文館、1993年を参照。

- 1) *Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*, n.1-2. エックハルトの存在論に関しては、『三部作への全般的序文』、『パリ討論集』、『創世記註解』、『出エジプト記註解』における存在を分析した先行研究がある。(中山善樹『エックハルト研究序説』創文社, 1993年, pp.91-119, 田島照久『マイスター・エックハルト研究』創文社, 1996年, pp.3-68を参照) また、『ヨハネ福音書註解』における始原論と存在の関連については, E.Waldschütz: *Denken und Erfahren des Grundes — Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts*, Wien, 1989, S.250-257, 及び中山善樹前掲書 pp.86-87の先行研究があるが, これまで同註解における存在概念そのものについて詳細に検討した研究はない。だが、『ヨハネ福音書註解』においても, 存在概念は内容的にも頻出度からみても重要な位置を占めている。更に, 同註解はエックハルトの主要著作の一つであるので, エックハルトの存在論を論じる上でも, 『ヨハネ福音書註解』における存在概念について詳細に検討する必要がある。
- 2) *Ibid.*, n.512.
- 3) *Ibid.*, n.562.
- 4) *Ibid.*, n.513.
- 5) *Ibid.*, n.562. 中山善樹前掲書 p.82以下において, 『ヨハネ福音書註解』における始原は, 理念・知性・存在として捉えられていることが指摘されている。それに補足して, 三位一体との関係から超範疇概念が導入された場合には, 始原は父のベルソナに帰される「一」としても把握されているといえる。その際, 「一」は一切の産出関係における始原とされ, 存在は産出の始原ではないことが強調されている。
- 6) *Ibid.*, n.342.
- 7) *Ibid.*, n.342.
- 8) *Ibid.*, n.562.
- 9) *Ibid.*, n.513. 神内のベルソナとの関係において, 善は父と子の結合としての愛である聖霊に帰されるが, 創造を射程にいれた場合には, 善は被造物の時間的産出に属するとされる。*Ibid.*, n.562.; 564.
- 10) *Ibid.*, n.221; 238.
- 11) *Ibid.*, n.325; 94; 151.
- 12) *Ibid.*, n.512.
- 13) *Ibid.*, n.564.
- 14) *Ibid.*, n.512.
- 15) *Ibid.*, n.516.
- 16) *Ibid.*, n.35.
- 17) *Ibid.*, n.52-53; 239; 308; 543.
- 18) *Ibid.*, n.44.
- 19) *Ibid.*, n.164.

- 20) *Ibid.*, n.6 ; 28 ; 34.
- 21) *Ibid.*, n.4.
- 22) *Ibid.*, n.556-557.
- 23) *Ibid.*, n.557.
- 24) *Ibid.*, n.97.
- 25) *Ibid.*, n.517.
- 26) *Ibid.*, n.515 ; 518 ; 540.
- 27) *Ibid.*, n.226.
- 28) *Ibid.*, n.226.
- 29) *Ibid.*, n.338 ; 426.
- 30) *Ibid.*, n.551.
- 31) *Ibid.*, n.74.
- 32) *Ibid.*, n.205.
- 33) *Ibid.*, n.42 ; 326.
- 34) *Ibid.*, n.337.
- 35) *Ibid.*, n.42.
- 36) *Ibid.*, n.343.
- 37) *Ibid.*, n.549.
- 38) *Ibid.*, n.518.
- 39) *Ibid.*, n.9-10 ; 18.
- 40) *Ibid.*, n.677.
- 41) *Ibid.*, n.141.
- 42) *Ibid.*, n.551.
- 43) *Ibid.*, n.109.
- 44) *Ibid.*, n.44 ; 232 ; 681.
- 45) *Ibid.*, n.107.
- 46) *Ibid.*, n.232 ; 682.
- 47) *Ibid.*, n.191.
- 48) *Ibid.*, n.26 ; 192.
- 49) *Ibid.*, n.228.
- 50) *Ibid.*, n.109.
- 51) *Ibid.*, n.107.
- 52) *Ibid.*, n.241.
- 53) *Ibid.*, n.396.
- 54) *Ibid.*, n.100.
- 55) *Ibid.*, n.318.